

白石裕二氏は、1989年から越智タオル工場の経営者と愛媛県立今治高等職業訓練校の講師の二役をこなす多忙な毎日をおこなった。早朝にいったん工場に行って織機を稼働したのち、昼間の稼働時間帯を女性従業員に任せて訓練校に駆けつけ、授業終了時刻の午後3時半になると工場に戻り、雑務をおこなった。越智タオル工場は他のタオルメーカーの下請けをやっていたため半製品状態で出荷しており、製織後の加工作業、たとえばシャーリングや捺染、ハム縫いなどを外注していた。それによって発生するスケジュール調整や配達作業などの雑務を、平日のみならず日曜日や祝日におこなった。白石氏にとって訓練校が休みになる日曜や祝日は、平日にたまった仕事を片付けるには便宜がよかった。白石氏をはじめ訓練校の講師陣は、現役で仕事をしている技術者やかつて現場にいた技術者が多く、昔も今もその点が専門校の特徴であり売りにもなっている。

越智タオル工場の閉鎖

経営者と講師の二刀流の毎日をおこなっていたある日、織機に差す油漏れが原因で越智タオル工場が火事に見舞われ、工場に設置してあった織機が相当なダメージを受けた。折しもタオル業界の斜陽化の兆しがあり、自動織機に代わって大量生産型の革新織機時代に入っており、これらの状況から相談役の父親と協議した結果、タオル工場の再建を企図するよりも廃業した方が得策であるという結論に達した。白石氏が越智タオル工場の経営を引き継いだ際に背負った「責任」、つまり創業者・越智五郎氏の子供はすでに大きくなり、叔母のために工場を維持する必要もなくなっていた。

しかし、廃業するにもそう簡単な話ではなかった。賃織りの経営体制から独立したタオル工場へ経営方針を変えてから自社で糸を調達しており、その分の借金を抱えていたからである。それでもなんとか借金を返済し誰にも迷惑をかけず後処理を終えて、1996年に四国タオル工業組合（現在の今治タオル工業組合）に脱退届けを提

出ることができた。

白石氏は、工場を閉鎖した年から愛媛県立今治高等技術専門学校（1993年に改称したため、以下専門学校）の講師職に専念した。講師に着任した当初は整経科の指導から始まった。定員10人のところ毎年5～6名程度の入学者があり、30代半ばから40代の白石氏よりも年上の女性が多かった。離婚を機に働かなければならなくなった人もそのなかには少なからずいた。日本の離婚率は安定成長期に入った1970年代から増え始め、白石氏が講師に着任した1989年時点で1.29（人口千人当たりの離婚件数）、1995年で1.60、1999年になると2.0まで上昇し、その後もしばらく増加した（厚生労働省「平成30年人口動態統計の年間推計」4頁）。手に職を付けようと必死の離婚経験者や就職意欲のあるごく一部の生徒を除くと、その他およそ半数は失業保険目当てであった。1年間、専門学校に通えば失業保険が支給されるという仕組みを利用して入学してくるのである。それゆえに、専門校の雰囲気は良い意味でも悪い意味でも全体的には和気あいあいとしていた。

入学の目的がどのようなものであれ、白石氏にとって教えることに差異はなかった。「生徒が今どういう状況か、意欲的か消極的か、仲間との関係はどんなか」などを気かけながら、一人ひとりの生徒を観察し、また話をよく聞いた。それでも時代的にはゆったりとしており、制度上、隔週土曜日の午後から学校が休みになった頃であり、土曜日の昼から皆でご飯を食べに行ったり、運動会や遠足があったり、勉強以外に教員と生徒と一緒に過ごす時間がたっぷりであった。

バブル経済崩壊後の「失われた10年」をへてタオル業界の不況が深刻化してくると、生徒の顔ぶれは女性から男性へ変わった。ただ、不況期では1年間の訓練を終えても就職先がないというのが現状だった。白石氏が指摘するように、「世の中の労働市場の需給バランスによって専門校の入学者に変化が現れるというのは面白い話で、好況のときは女性、不況のときは男性が増える。専門学校にいと、

世の中の様子がようわかる。」また、生徒のなかには将来タオルメーカーの2代目あるいは3代目を継ぐ男性も入学してくるが、こちらはタオル業界の景気状況をまともに照射している。

時代が大きく変わっても、つねに初心を忘れず「一球入魂」の姿勢は変わらない


21世紀に入りタオル業界が重大な危機に直面したとき、白石氏は専門校のタオル専門科はなくなるのではないかとさすがに危機感を抱き、専門校でどの工程も教えられるように染色や縫製についても勉強した。同時に、もしものことを考えて、夜間の塾講師も始めた。学生時代から理数系科目が得意だったことから、この特技を生かして週に2、3回夜間のみ数学や理科を小さな私塾で教えるようになった。実はその伏線は越智タオル工場を閉めたあたりからあり、タオル関係の人から「うちの子、教えてくれへんやろか」と頼まれて週に1、2回ほど家庭教師をやったことがあった。教師と生徒の関係ではあったが、上から目線でなく、のちほど触れるように、一緒に何かをつくり上げていく感覚が白石氏は好きだった。

2004年のセーフガード見送りによってタオル業界の将来に暗雲が立ち込めていたが、JAPANブランド育成支援事業による起死回生をねらった地域ブランド政策が軌道に乗り出すと、「今治タオル」とともにタオル業界も注目されるようになった。その結果、専門校にも高校を卒業したばかりの若者が入学してきた。表2（前号の2020年9月号に掲載）にあるように、2006年には学科やカリキュラム内容も変わり、織物管理科（普通課程）、織機調整科（短期課程）、染色科（短期課程）、整経科（短期課程）の4科が織物エンジニア科と染色エンジニア科の2科に再編され、より総合的にタオルづくりの基礎が学べるようになった。時代によって生徒の年齢や性別が変わっても、白石氏はつねに初心を忘れず「一球入魂」の姿勢は変わらない。



専門校で生徒たちと一緒に実技の講義をしている様子



専門校での講師に注力すると同時に、中・高校生を対象に数学を教える塾の講師も本格的にとり組むようになった。「本格的」というのは、すでに小さな個人経営の塾で週2～3回程度数学を教えてはいたが、生徒がなかなか集まらなくなり教える回数が減ったために、大手の（株）明光ネットワークジャパン  が運営する明光義塾で大学受験生向けに数学を教えるようになった。ここ5年ほど日曜日以外は毎日、専門校の仕事が終わってから夜10時くらいまで塾で教えている。父親の進言から教育者の道を歩んだが、白石氏にとって第二の人生の節目となり、いつの間にか天職となった。それ以来、専門校と私塾の講師は現在もつづけている。

教育の現場で一番大切にしていることは「環境づくり」

長年教育の現場に携わっている白石氏は言う。「人が育っていく姿を見るのはいい光景です。十人十色と申しますが、百人百色、千人千色です。教えるなんておこがましい、少しの手助けでいいとおもいます。少し背中を押してやる、きっかけをつくってやる、その程度しかできません。説教がましく人生を語るなんて性に合いません。訓練ができる環境をつくるのが大事だとおもっています。」

また、白石氏に教育者として大切にしていることを聞くと、次のような回答が返ってきた。「どんな学生でも、一人ひとりに個性があり能力もあるんですね。それを見出し引き出してあげることを一番大切にしています。重要なのは、学生自らが自分に自信を持ち自分の能力に気付けるような環境を用意してあげることです。これは、つねに心がけています。」白石氏は、けっして上から目線ではない。学生と同じ目線に立って教育する。それゆえ、声かけは誰よりも熱心におこなう。白石流の声かけは、授業中も休み時間中も冗談を交えながら生徒一人ひとりとコミュニケーションを頻繁に丁寧にとることである。

専門校には、元気な生徒もいれば大人しい生徒もいる。とくに殻にこもった大人しい生徒が声かけを繰り返すうちに、生徒の方から質問してきたり、意見を言ってきたり、自己を表現するようになる。また、入学時からモノづくりに興味のある生徒もいれば興味のない生徒もいる。専門校には、さまざまな事情で入学してくる生徒がいるのでやむを得ない。しかし、とくにモノづくりに興味のない生徒が指導していくうちに「ああ、タオルって面白いな」とおもって、将来タオル関係の仕事に就く。こんなことが現実にかかるのだが、この瞬間は指導者冥利に尽きる。白石氏は、「生徒が変わっていくのが見たいんですよ」と目を輝かせる。

白石氏が専門校の指導者となったときは、「これも教えないかん、一生懸命に教えないかん、時間どおりにやらないかん」という気持

ちだけが先走って、厳しい指導者だった。時間とともに経験を積んでいくうちに現在のような指導法になった。

今でこそ専門校に授業料が設けられているが、長い間無料だった期間が長い。それは、技能を身に付ける「職業訓練校」ゆえに失業者の受け皿の役目も負っているからである。この理由から、白石氏は授業料導入を巡って最初は反対であった。しかし、いったん導入されると生徒の心構えが変わり、またある生徒が「安い値段でこれだけ多くのことを教えてくれるんやから、こんなええところはないわ」と言ったのを聞いて、専門校では授業料に見合った指導をこれまでもずっとやってきたことを改めて感じる事ができた。

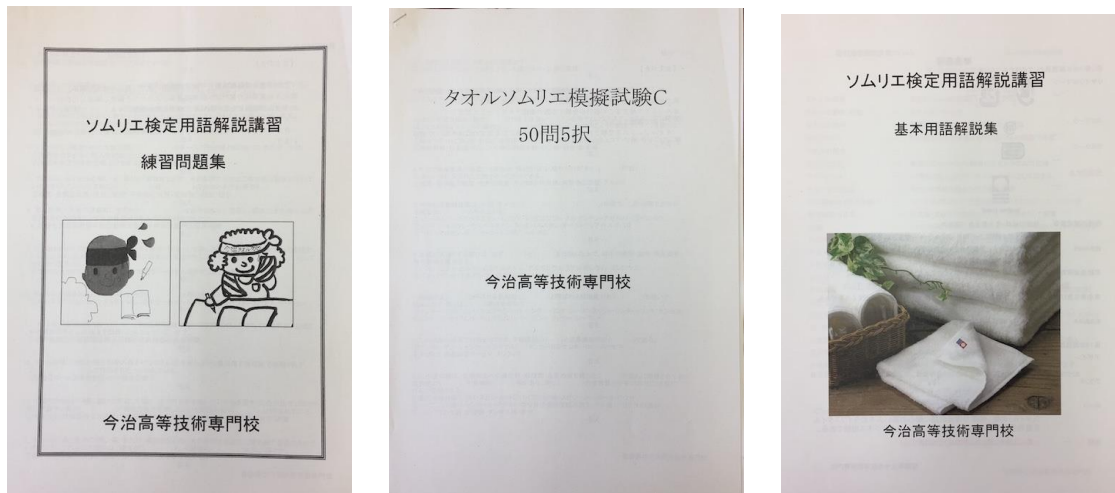
地場産業の発展には地域連携が重要である

専門校でのカリキュラムは長くて2年である。人を育てるには十分な時間とは言えないが、白石氏は「いい人材を地場産業に送り出すのが地場産業の発展に繋がる」という考えのもとで、専門校と愛媛県立今治工業高校、タオルメーカーなどが連携することの重要性を説く。実際に昨今は昔に比べると、各組織に同じような考えを共有する人がおり、この連携がうまくいっている。

地元ネットワークの広がり而言えば、今治タオル工業組合がJAPAN ブランド育成支援事業を始めた頃から、組合と専門校との関係も深くなっており、パイプ役のひとりである白石氏の場合は、組合が設置した「タオルソムリエ資格試験」制度や「今治タオル工業組合社内技能検定」（職種：タオル製造）」制度をとおして一緒に仕事をしている。

タオルソムリエ資格試験は、2007年9月に今治タオルのブランド化政策の一環として今治タオル工業組合が設けた制度であるが、白石氏はさっそく第1回目の資格試験を受けて合格し、認定番号4番を授与された。これを発端として、タオルソムリエ資格試験の講習を地元の銀行をはじめいろいろなところで依頼されるようになり、

また組合の依頼でテキスト作成にも加わるようになった。今はやっていないが、白石氏の講習は、長年教壇に立っているだけあってわかりやすく、しかも受講生の合格率が高かったため口コミで評判となり、一時期は引っぱりだこだった。専門校の生徒たちも将来のことを考えてタオルソムリエ資格試験を受験するので、テキストや問題集の作成は理に適った仕事である。問題集は単に Q&A を羅列するのではなく、文章の合間に写真や娘に書いてもらったイラストを挿入し、なるべく生徒に興味を持ってもらえるように工夫している。

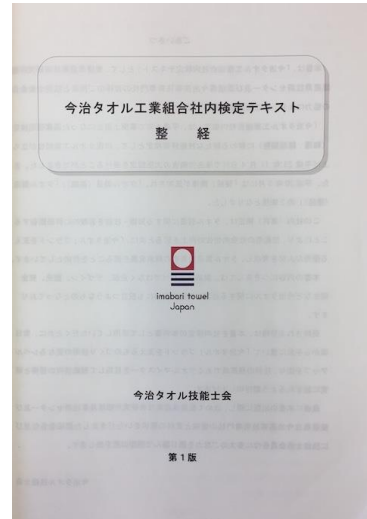


白石氏が作成に携わったタオルソムリエ資格試験のテキスト類

「今治タオル工業組合社内技能検定」（職種：タオル製造）は、技術者の育成を目的に今治タオル工業組合が力を入れている制度であり、厚生労働大臣認定の社内技能検定である。この制度は組合内の今治タオル技能士研究会、愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センター、専門校が主体となり協力して運営しているものであり、社内技能検定は設備の揃っている専門校で毎年 8 月に開催されている。社内技能検定は実技試験のみならず筆記試験もあるためテキストが用意されているが、この作成にも白石氏が一枚噛んでいる。白石氏のタオルづくりにおける知識と経験が評価されての抜擢であるが、それだけではない。タオルづくりについては知識の宝庫である今治

タオル技能士研究会の技術者たちの言葉を、正確に文章にしてくれるからである。換言すれば、大御所の技術者たちの言葉を若者たちにわかりやすい言葉に置き換える。長年生徒に向き合ってきたからこそそのスキルである。

こうした経験は白石氏にとって貴重なものとなり、やりがいもある。地域産業の将来のために地域の人びとが協力して連携を図る。その活動において、白石氏は自らの経験を地域に還元できるし、勉強にもなっている。



社内技能検定のテキスト

人生の岐路において父親の存在は大きかった

こうして人生を懐古すると、白石氏の人生の節目には父親の初夫氏がいた。「父親の影響はものすごい受けとるね。真面目な人間やったんでね。それと苦勞人よね。20代そこそこで父親代わりに一家を支えていたしね。わたしと全然違ってよくできた人間やったね。親父と比べると自分が『勉強できた』と言うのは恥ずかしいくらいやね」と、白石氏は父親のことを語る。父親の進言に従ってタオル工場の主人になり、父親が務めていた講師の跡を継いで自身も講師になった。その人生に悔いはないし、むしろ教育者として長年現場に立ちつづけられていられるのは、タオル工場での経験があったからであり、講師の職を得たのも父親から機会をもらったからである。

何事も丁寧で真摯に対応し、それでいて好奇心旺盛で晩年は料理本を買ってきて自分で料理したりする父親だった。若い頃は反抗した時期もあったが、白石氏にとって人生におけるもっとも身近で尊敬する先輩が父親だった。（次号につづく）

